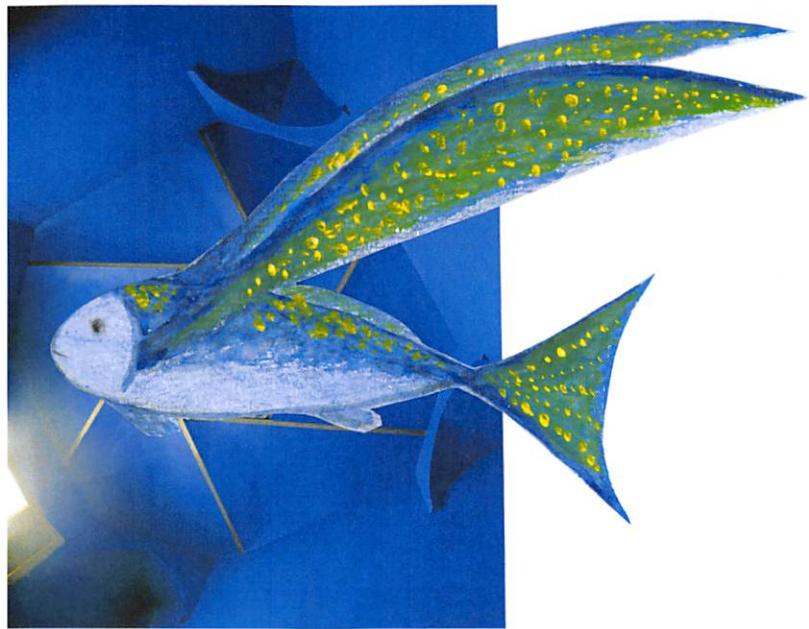


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018.2



平成30年2月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻第2号

No.717

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もつと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを持ち込み、大きな力、——それをホメロス以来、ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

合歎の花

篠原まり子

百均の方位磁石をお守りに秋の入り日を迎る幽けさ

うたた寝の胸に小鳥を眠らせて僅かな時の夢を共にす

手のひらの小鳥のサブリ一つずつ素直な小鳥の啄む感触

五島灘『沈黙』の碑は夕光に沈黙は哀しみそれとも安らぎ
ヘルペスに苛まれたる夏は過去はるかに碧き周作の海

上達は競わぬほど年の年齢層プールの中のカラフルな雑魚
ゆらゆらと水を背にして目を瞑る母の胎内狭かったこと
妹の亡きあと義弟よるべなく歌こそ詠まめと溢るる思い

昭和十年生まれ。滋賀クループ
を経て、現在、羊ヶ丘一郎所属。
歌集に「ひとりの春」「ねこじゅ
らし」他がある。

散歩道青木繁の旧居に寄りぬ折おりの庭木蓮苔む

「海の幸」ブロンズレリーフの福田たね繁の郷の風いかならむ

奥入瀬の旅の約束地図に在り夫は逝きにきプラタモリ見る

旅好きの夫の終焉鎮めたる奥入瀬溪流の解かれゆく謎

映像は引き揚げ難民博多港ここがにっぽんわたしは幼

父ははは語らずなりき旧満州の「七三一」も「ある告白」も

にっぽんは学校嫌いの始まりに方言出来ずいつもぼつねん

葉見ず花見ず彼岸花現つ世にいつか何処かで逢いたき人あり

人も犬もゼッケン付けて出発す無法松マーチでノルディックウォーク

五キロコース終着点の合歛の花見上げて暫し小倉城辺り

合歛の花夢の色した悲しみは夫を看取りし滋賀医大の窓

父ははのもとへ逝く時わたくしにダニー・ボイを聴かせて下さい

作品 A

朝井恭子

山茶花

・森

磯田ひさ子

雪原

・森

花盛る山茶花の垣に足を止め拾いし花びら指に冷たし
拾い來し赤き花びら私歌集のページにそっと挿み込みたり
土の上に散りしく赤き花弁を散歩の犬は顔寄せて嗅ぐ
人通る舗道に下りたち忙しげに尾を振る鶴鳴乾きを誘う
晩秋の夕映にたつ送電塔見上げつづいて深し孤独は
戦時中に飼いいし「ボチ」を思い出す麦入り御飯分け合ひ食べしを
食物の乏しさ故に手放しし犬を憐いぬ飽食の世に

飯田勤

道ひと筋に

・む

市原志郎

皇帝ダリア

・萬

風を切り自転車走らす畠道植ゑて間もなき杉苗そよぐ
道に沿ふ植木烟に初冬の陽があふれてはやも紅椿咲く
もつこりと防寒服に身を固め自転車こげば汗の滴る
つつがなく米寿迎へてしみじみと歩み来たりし道ぶり返る
ふる里の教師となりて子供らと田に寝ころびし遠き想ひ出
あの子等もはや老境に入りし頃幼き日々に想ひ馳せるや
教育の道ひと筋に歩みきてこの秋寂黙の一人となりぬ

電力の喧^{けん}々しき世にしろがねの水音ふたすぢ山に添ひたり
そのかみの嫁の仕事の寒陋^{かんろう}し鍛へられしや身もたましひも
雪原に晒す白布染み通りみづから白を増してかがやく
雪原に家族になれぬ家族より嫁は解かれて息をつきしや
あけくれに失せたるひとつ古書店に求めし和綴ちの『北越雪譜』
満ち足りて足るを知らざる日本は義のなき民になり下がりたり
あしひきの山の見えざる街に住み思ひひらたくなりてしまひぬ

市原 やよひ

霜

・萬

奥田 阳子

木漏れ日公園

・羊

枯れ葉かと紛うばかりに舞い落ちる鳥は霜降る烟の中に
雪残る烟は屋根の形して隣家そのままの姿を寫す
病院の待合室は静かにてしわぶき一つに空気が動く
シクラメン売り出しチラシ入り来て今年も暮れが身近となれり
夫の詠むた書き終わり何がなし屋根の向こうの冬の空見る
ふるさとの真赤なりんご届きたり初雪來たとの知らせも乗せて
手際よく米研ぐ男孫は小学生祖母の出番もなくなり始む

小野 雅子

秋

・羊

嵩のあるコートをまとふ人の増えバス停の列くろぐろと延ぶ
木犀の香もすでになく一の酉の脇はひもテレビの中だけのこと
三十分立ちっぱなしで来たることを忘れさせたる武蔵野の秋
宝石と透析を聞きちがへ八十歳のクラス会盛り上がる
世の人がまだ知らぬ頃ジャコメッティに憧れてるし友の逝きたり
歌会の席にて気づく「海ゆかば」知らぬ世代のわが子であるを
短歌やめし人にあるときうた生まれ空を漂ひるるにあらずや

奥田 清和

うつろひて

・大

菊地 栄子

霜月の草

・湾

出征の祝に賜ひし師の色紙 日の本一の槍詠みし歌
かにかくにものは書くべし古びたる色紙の文字の魂黙しるる
とりどりの気のうつろひに眞の相こよなくとらへ歌詠みませり
十五分の休み時間外に出て相撲を取りしわが十五歳
一坪ほど割りあてられし学校園いも、なす、きうり、あさがほ植ゑし
コンピューターの世となりたれど浮世絵の弥次喜多の世といづれ優れる
自らの本質忘れあげつらふ議員諸公に呵呵大笑す

人の背に光ゆれいるあたかさ木洩日公園歩調しづかに
揺るるがに午後の光につつまれて歩を進めゆく樹のしたをゆく
どこよりかマリンバの音の流れきてその音までをゆるやかに行く
樹の下にみとれていたり水の面に落ちゆくまでの広葉の速度
弧をえがきよろこびの声に来たるかなピラカンサ今房重く垂る
枝に置く指やさしげに来る鶴のピラカンサたわわの実に寄りてゆく
短かりし秋に遭わざる鶴の群小春日の今日ついばむを見る

柏原宗一

とはず語りに

・羊

風が立つ一氣につのりかざ上にわが愁かう置くしまつとなりぬ
書きさしの原稿用紙は訴へる何を書くやととはず語りに
見渡しにまつすぐ見ゆる谷間より何鳥ならむ二つ飛び立つ
うすべにをまとひて静かなる一人ゐて何も言はずに姿を消して
かまびすしき人のゆき来の多い街——荒山四天皇寺とほとは言ふなり
阿弥陀さまがわれに寄り来るさま見えてやがて帰りたまふさみしさ
昨夜読みし阿弥陀如来のさまを書く御影のことをくり返しるて

唱和する女の声の柔らかさ等と三弦控えめに鳴る
不確かな未来なれども庭に引く霜月の草みな青青し
捨て去りし蜘蛛の脱け殻ゆらゆらと遊ばれており上る蒸氣に
ストレッチのステップ踏みつきこちなしようやく歌の校正終えて
真さやかに虹立つ車窓瞬く間場面はうつるマジシャンめきて
野の風は水の流れを押し返し川面かすかに波紋をひろぐ
父母も語らずすでにみまかりぬわれは四人の祖父母を知らず

草刈十郎 無人駅

・世

河野繁子 穴惑い

・雁

雲の峰立ち上がりつつ一本の宇宙の巨木となりてゆくなり
いつまでも続ける秋暑に残生の銷ことのほか帶びる氣ぞする
長き夜に消したき記憶つきつきとうかび眠れぬ夜となりたり
萩の花咲けば集へる虫たちも散れば羽音のいつしか消えぬ
乗客も降客もなき無人駅稻の香あまた乗り込みて来し
何やかや騒々しかる地球より名月ひとりしみじみ仰ぐ
道の辺に写生の少年秋天を秋天らしく描きさはやか

國井節子

鶴

・春

小西美智子 水

・羊

老い母に呼ばれしやうな心地して雨戸開くれば鶴たちこむる
はなびらに朝露を置く野紺菊枯れ立つ根元にたしかなみどり
急坂の道を降りくる学童の帽子に落暉のまばゆきひかり
垂れ込む初冬の雲の切れ間より洩れる光の七色重ね
空調の生き届きたる病室に季節のうつろひ知らず眼れる
孫のやうなりハビリの師に筋肉をほぐされ夫は命をつなぐ
うら若き看護師さんに促されベッドのままで浴室に行く

小泉泰清

一人で一人

・う

枕元に一杯の水そなえ置く習いとなれり母のせしこと
夜半めざめ渴ける口にふふむとき「水を」と逝きし被爆者のたつ
過ちは繰返さぬと碑に彫るも核にすがれる国となるとは
ヒロシマにナガサキ フクシマ カタカナのかなくひびく悲劇の町は
誇らしきカタカナ書きのチバニアーン世界に通ずる世紀の名とぞ
震災に備うる水の「古道水」熊野の道をいまだ踏まずも
夕餉の菜買いに二人で渡る橋さくら紅葉が夕日に照れる

小林能子

赤水疾駆

・羊

北鮮の恐怖を煽り兵器売るトランプ大統領セールスの鬼
戦時下の悲惨を体験せし世代改憲論を冷静に聞く
四面、山 スイスのやうに中立の平和望まむ海では夢か
訪るに怪訝な顔で寄る犬と吠え立つる犬空巣叶はず
山茶花の生垣沿ひに歩み行く直視の雲は夕日を孕む
銃剤のシール五枚を取り出して粒を押し出す食前食後
妻と僕長生きをして心配を掛け合ひ乍ら二人で一人

腑に落ちぬひとつあること黄の花をすくとかかけ秋のつわぶき
のきさきの竿に止まれるジョウビタキこの秋飛来の挨拶に来る
小春日に動きのにぶき穴惑い昨日も今日も同じ道辺に
雪虫のふわふわ飛びて冬を告ぐ穴惑いもう眠りにつかな
冷えしるき朝のオリオン逆さまに手を振りながら今日より師走
神話なる巨人の獵師生けるごと空を腹追い西に傾く
オリオンに親しむ明けの窓ひらく昔はもっと朝寝なりしが

小山宣子

秋思譜

・詩

坂上直美

木島櫻谷展

・天

十月のカンナ終りの花赤く凜として咲く小さけれども
さだめなき山茶花時雨やさぐれしわれを濡らしてさ庭を過ぎぬ
紫の野牡丹つひのひとひらのひと落ちわが秋思譜も空
土曜日に訪ねくる子を待つ思ひひと日千秋の思ひと言はん
朝寒に着たるセーター昼過ぎて着替ふる日課些事なれど
山帽子の朱き実とりてすべもなくもがり笛過ぐ山の辺を
死の懼れまだある不思議白く散るかすみ草卓に今日も果つ

近藤栄昭

鍵柄山

・福

頂あり峰も見える山形に雲浮きあがる利根川の先
晴れてくれ登山口まで三時間きっと晴れるよ国定忠治
もみじ散り裸の木々はすつきりと上は冬山赤城に参らん
初雪の残る日陰にカサコソと枯葉乾かす風の吹きいる
霧氷ふる標高線ある寒気団黒檜を包み山繭となす
赤城山大沼は青くザラつきぬ片頬しひれる程の北風
下見とか丸顔豪太氏もの静か大丈夫という冬山のツアード

近藤芳仙

朝陽

・信

あけがたの雲の真赤くそまりをり峯のむかうを陽は昇るらし
稜線に手をかけ昇りくるやうな今朝の太陽おちはしないか
この盆地あかるませつつ昇りくる大き陽の熱ここまでとどく
ゆうらりと昇りゆく陽の大きさよ包まれてゐる生命ちひさし
眠いから寝かせてくれば叔父は言ひ起きたことなき駆となれり
昇天の叔父の魂かと紛ふまで陽はまぶしくて日脚をのばす
はるかなないとみなあらむこの日頃身巡りゆりかはりゆくなり

佐久間晟

日乗(七)

・湾

自らを照らしつづける太陽を持ってと言われて続けし短歌が
秋もみじ寂しく咲く日人の来てこころの絆(はな)を置いて行きたり
わが歌の細細しき年輪六十年時折は妻に押されしことも
わが勤め国家公務員として三十余年東京から旭川まで思い出も多き
その故か何かは知らねど瑞宝双光章今も輝くわが床の間に
短歌とも人とも疎くなりし日よただ一日の長くなりしよ
わが意志のままに動きし車なれどこの楽しみも捨てて久しきき

陰謀と南瓜知らるる鹿ヶ谷博古館あり静かなる街
「このしま」と読めず「きじま」と呼びしこと許し給えな画人櫻谷
熊の眼も獅子の眼さえも優しかり木島櫻谷京に描ける
雪の原狐一匹歩みゆく眼の光月より皓し
青孔雀頭を挙げて見舞かす百日紅の白を従え
銅鏡はいくたりの人をうつし来し面にこぼる涙もありけん
桜谷の住みける町にほど近くわが町ありき京の北方

坂出裕子

落葉

・洛

こんなにも美しきものかな透きとほる光のなかに炎ゆる木の葉は
考へることなくもみぢ眺めるる永久の時間を神は賜はる
賜物の刻とぞ思ふ公園の桜紅葉を踏み歩みつつ
音たてて枯れ葉踏みゆき八十歳の姫(はな)八歳の少女となれり
靴先にかるく触れる枯れ落葉やさしき音の胸に沁み入る
秋の日の光のなかにいつせいに揺れてすすきは花火となれり
告ぐることあらぬこころの炎ともしづかに間にしづむ紅葉は

佐藤道子 電磁波

・甲

世木田照比古 幼子

・茜

人工の台風近づくこの寒さ神戸の真冬よ山の八月
 温度より体の芯が冷え冷えと電磁波操作の夏の台風
 電磁波の鳳の雲現はる湿気吸ひあげいづくに運ぶ
 発地市場の芝生の椅子に日向ぼこ夫の日課よ八月半ば
 枝折れとまがふ音して猿が来る屋根は動物達の公園
 息がぬくめ置きしをよなく喜びて臥床に入る夫九十七歳
 夫の体調惡り後晴れ日向ぼこゆつくり浅間の青空眺めて

椎名恒治

皇帝ダリヤ

・橋

皇帝ダリヤのふくらむ苔揺れてをり見上げつつ歩みわれは近づく
 紅葉せる楓の高木は梢吹く風におひたしどんぐり落とす
 クレーンの首高々と振りながら瓦礫の山を積みあぐ
 何十年経たりし松の根こそぎに倒されてをり鉄の爪に
 空晴れて風強けれど杖つきて小松園を一巡りせり
 十一月三日岩田正氏身罷りぬ九十三歳われ同一年なり
 枯葉舞ふ空にクレーンは止まりぬ今日は祭日なれば

鈴木結志

永遠の天女

・福

ねんごろに「なじみ」総揚げわが妻の米寿称えて祝いくれたり
 脳瘤の術後の妻の肺転移発見おそしつびてもおそし
 食欲の細りて妻のやつるも笑顔ありしを救いと見つむ
 息づきもこわそうさぞやつらかろう妻の涙をふきつと思う
 絶え絶えの息の妻の手握りしめ命をつなぐ温みをおくる
 今際時を息子に手握られ安らげる妻の「最勝の生」を尊む
 苦します息ひきし妻永遠の天女のことしやすらぎの顔

閑根栄子 鮎

待降節

・埼

走りゆけば幼と言えど迫いつけず遊戯場にまた曾孫見失う
 逃げる追う追えば逃げるの歳の差は八十一年また見失う
 ブレークの効かぬ男の児を縋いぐるみのアンパンマンに飛びついている
 幼子の指差す先の水底に小魚の群が青藻ついばむ
 孫に似しいたずら者の小魚が穴より出でし蟹に追われる
 「ビーポーもカンカンカンには勝てないか」遮断機の前で孫がつぶやく
 空襲警報に泥田に伏せし思い出を返してミサイルが通過していく
 空襲警報に泥田に伏せし思い出を返してミサイルが通過していく

椎名恒治

皇帝ダリヤ

・橋

晴れし夜の就寝前にたしかむるオリオン星座のベテルギウスを
 億光年の永きのいつかベテルギウスもう爆発終りているかも
 石仏が流星を呑みし伝説を思い出ししつつ眠りに入る
 石仏の写真を蒐めしことなども遠き日となる何処に仕舞いし
 とりどりの小菊を咲かせし畠よりて残菊の風情の頃と見に行く
 急ぎ飲みコーヒ一杯を置きて行く夫に囲碁打つ待ち人のいて
 取り出ししダウンコートのポケットにこぞのよすがの鮎の一粒

閑根和美

待降節

・埼

アドベントの默想会にと招かれて右近を語るこのよろこびは
 わがひと生右近を通しうかびくる神の招きを気づかずありし
 心身をえぐる苦しみその傷のふかき洞にし平安は生る
 金沢の吹雪く雷鳴よみがえり右近の長き隠遁の日々
 むつと鼻をつきて食物うけつけず椰子油の臭うマニラの朝は
 落款を押したことしと言わしめき右近の最期われにも来るや
 繼続する殉教といわれ流血を見ずに右近は福者となりぬ

高尾恭子 紅蓮

・大

竹下妙子

霧ふる里

・霧

守りつつ変わらなくつちや「御ちゃわん屋」一子相伝の紅蓮を見たり
胸うちの振り子は右に左にと樂吉左衛門の多弁をゆるす
土塊にぶつかっている陶工の意気にゆがんだ黒樂茶碗
野太きは風の意匠か金彩の黒樂茶碗の宙あらあらし
伝統は混りつつあり長次郎の手捏ね無心に侘び茶をきわむ
不発弾の黒き塊かと幾たびの乱世くぐりし茶碗は黙す
長次郎の手なる器の黒錆びて闇の底ひを仄明かりする

高津砂千子 狂猪

・風

澄みわたる空に紅葉の綾なして清麻呂公のまつりことぼぐ
和氣神社の祭りの樂のながれくる里芋掘りを手伝う畑に
六人の息びつたりと和太鼓の放つオーラに釘づけとなる
清麻呂の危機を救いしイノシシは狂猪となりて社に
装束は着物に帶のたたずまい狂猪の晴れやかな日よ
木洩れ日の揺るるなりに万葉の歌碑あり友と声あわせ読む
とまれ今われはながらえ境内に清麻呂公の遺徳をしのぶ

高橋和代 侵されずあれ

・桃

田土成彦

影

四個ある電波時計はみな同じ時刻をさして何かつまらない
デジタルの数字が音も無く変はり奪はれてゆくわれの時間か
おぼろなる九輪の影を土に踏み千年とはただこれだけのもの
草むせば草に隠るる道標の文字の崩れを読みがたくをり
日没は四時五十分灯とともに窓が思ひ出語り始める
釣り忍に霧吹きかけて仰ぎ見る雲の白さはもう秋のもの
猿 入鹿 貝蛸の名はいにしへのきらきらネームを歴史は残す

田土才恵

軒端

・宙

脳裡にみそひとじの惑ひるも熱ある身をも急きたてて来る
果つるまで病む身を詠ふ宿命かもどこかで変転など成せざるや
病み深むとて侵されずあれ頭脳 残り少なき歲月なるとも
身一つの日々の動きの儘ならぬ其の日の來るまで氣楽と過ごさむ
点滴は「一時しのぎ」とナース言ふ薬は胃の腑さわがするとも
微熱ゆゑのこの身の懈さ除かむと遠慮などせず日々通院す
さ庭にも季は移ろひ巡り来し名所の紅葉を眸に映す

土佐みすき跡形もなしするさとに母の形見のはや絶え果てぬ
ふじばかま微かに香り漂わせははの思いをわが庭におく
来る年は母七回忌ほつぼつと小菊咲きて垣の明るむ
吊し柿軒端に映えてこころまで明るむ秋を幸いとせん
長距離バスの背に書かる「あの大きい橋のむこうへ」と誘われおり
「こころ旅」の画像に並ぶ自転車のいつか重なるわが通学路
ペダル踏みこの坂道の風を切るいつか出会いし風かもしけぬ

中島央子 里芋の花

白子れい 友よ 森・洛

繁る葉の間にときのま雪白の長き芭もつ里芋の花
竿になり中空をゆく利目に見よ人のこころの瘦せゆく日本
旧街道つるべ落しの西の刻待人のなきバス停点る
「だいちやうぶ」拒むを無理に従ひてくる娘の尻尾の皺におどろく
問はるれば如何に応へむ遠からず系譜の絶ゆるこの家のこと
たたかひの終りし夜の明るさに十四歳われの『藤村詩集』
彫りふかき花鳥文様みがきをり父の残しし堆朱の文箱

中島義雄 茶の花

・岡 鹿

寂かなる月日移りて朝寒の障子に枇杷の花がゆらぎぬ
妻逝きし日より月日瞬くに見頃をもたぬ枇杷の咲くなり
初霜の庭に出づれば大根の葉に蕭蕭と冬がかがやく
光りつしぐれの雨の移りゆけば井戸端に大根を洗ふ妻顎つ
妻逝きて遺し老いを勞はると人來て残菊の色を言ふなり
金色の蕊を抱ける茶の花に逝きたる者の矜持をおもふ
枯れ菊を焚けば仄かに匂ひつああ万物に時は流れぬ

萩葉子 莓

・銀

日本の百岳山のひとつ山泉ヶ岳に登りし日はるか
ひろびろと山に平地がある驚き紫の花の記憶と共に
首都圏のものもの情報携えて美術館めぐるリュック背負いて
随分なこと言う人がいたものだ葉がさかさと秋が物いう
一錠のおくすりさえも忘れてるもと大事な気がかりありて
バスがきて並んだ列が動きだし大きな息吐く一番寒い日
大好きな苺の思い出話しつつ大きな苺皆でいただく

・浜谷久子 金色の街

金色の街は公孫樹の天高く燃えしすかな光となるまで
バスを待つ人に黄葉のふりかかる街の時間のさわさわといく
長雨の青虫取りの中斷にキャベツの葉肉の消えて網目に
夜盗虫青虫葉虫ひそかなるいのち謡歌の秋の祭典
帰省する親子三人孫二歳母親の手を握って離さず
どんぐりの歌を覚えて「さあたいへん」児はリズム取る首をふりふり
四ヶ月大きい男の子は手を伸べてエスコートする従姉妹二歳を

茶道の短歌の友みまかりて通夜の席わきくる涙かみしめいたり
家具・屋敷売りて遺産の整理なしホームに入ると伝え聞きしに
葬場に飾られるは若き日の写し給ならん頬のつやめく
おのが血を継ぐ子もたざる寂しさを互みに語り慰めあいしを
まなこ閉じ永久の眠りに入りたる友よ如何なる夢にあそべる
今生の最後のわかれに花添うる斯くまで瘦せしか君が寝姿
につこりと今にも語りかけくるか友よ此の世の苦を捨ててゆけ
ぱぱりようこ 春のエントラス

浜本 芙 美 運河

・夢

藤川和子 樋 鶴

・眉

冬の潮みちて静かな昼の運河水鳥一羽の姿の見えず
学び舎へそして勤めの歳月を通りたりしよこの運河沿い
岸壁を打ちて静かな冬の潮湛える運河ふくらむことし
自転車こぎ毎朝買物にゆく夫を当たり前のこと見送りて併つ
さむざむと続く雲の群れ吹く風のままに流れる生きのいのちも
戸外は雨わが体内の潮も雨うつうつとして天仰ぎおり
街路の辺黄花かかける巻耳が遠き犬との記憶引き寄せす

檜垣美保子

雲

・昴

藤田美智子

ミツキ

・新

ひよどりの鳴く声と影まどわくに一瞬入りて消えてゆきたり
はやばやと暮れてしまいぬ街灯のひかりのなかを枯れ葉舞い散る
高層のビルのうしろに夜の雲流れづけてときおり月が
夕暮れの橋わたるとき正面の月のうさぎのかげが餅つく
スノードーム水の中に雪が降るしずかに終わることかなします
「暖かしてくださいな」ももいろのもこもこの雲をははの背中に
最低気温七度の朝に木造船漂着のニュース高き白波

福田庸子

山城

・今

船田清子

ひひらき

・天

夕映えを消しつつくる川の面に大氣重たくしづみくるなり
遠き世の和田の戦さを伝へる山城跡をたどりたどりて
石積みをかすかに残す山腹に鳥天狗の全たかる像
和田姓を多くもつ村義盛の縁たれば人あたたかき
くだりゆく鬼怒の流れを日に幾度見おろしたりや落武者生きて
あかときを四方にしづめて照りはゆる太き満月我もとけゆく
中継の画面の端をあふれさす背高泡立草北上進む

電線に高鳴く百舌のテリトリーさくらもみちは一せいにもゆ
まなかひを低くよぎりし鳥影の紋付鮮やか尉びたきなり
木枯しの翌朝見かけし尉びたき桜もみちを忙しく歩る
霜月の寒氣憶ゆる散歩道悔しき思ひ透きとほりくる
幹下に皮を剥がれて吊し柿乾けば渋は抜けるものかは
吹き溜まる桜もみちのおほかたは虫喰ひの跡〈泣き面もある〉
小苑の石の上無氣味なものは何蝉の抜け殻山と盛らるる

運動会のリレーを走りしころよりか張り切つてしまふわが性分は
桁多き引き算に悩む孝太郎給料もらふ日がやがて来る
汗だくの顔は見えざり着ぐるみのミッキーと子に握手させし日
梨畑の徒長枝はみな空を指す〈起つ〉と心を決めたることく
最後まで聞こえるとて撫でにけりいつでも話を聞きくれし耳
バイバイとおどけることく言ひたるが最後になるとは知らず応へき
すでに遠くなりたる背中を見る」とし喪中欠礼に知らされし死は

嬉しやな腐葉土・肥料に生きかへり松初冬の香を立て初むる
ひそやかに見つむる眼を投げかけて内なる想ひを醸すひひらき
夕間にまぎれてふうーとつ吐息終の白きかなしみをきく
寒風の信号待ちに見上ぐれば黄金の鐘立ちエール送り来
昨年満月、今年四日の月にして天なる君へ“ガンバッテルヨ！”
町中の桜もみちは燃ゆるなく枯ぶる音を引きて飛ばさる
九人を切り刻みたるは凶惡犯原爆・空爆紅されぬまま

牧 雄彦 終のいのち

・大

三浦好博

はひふへほ

・銚

朝の日に山のもみぢのいろ映えて秋ほととく過ぎゆく気配す
緑葉のかたへに真つ赤なもみぢあり日に透けて一際燃え立つばかり
逆光にもみぢ葉の色冴えかへり終のいのちのかがやき放つ
カーブ曲がりてあつと驚く真黄なる大き銀杏樹かがやきるたり
日に透けて銀杏葉のすぢが見えてゐるやがて落ちゆくのちを思ふ
汝がかほにもみぢのいろが映りゐて今年の秋は去りゆかむとす
並びるどうだんつじの色深み冬の近づく足音を聞く

松浦禎子

鉈あと

・羊

無償にて鈍翁より引きつがれし白雲洞田舎家風の畳に正座す
梅雨に入り草生のみどり濃き庭の石飛び越ゆる力あるうち
足元おぼつかなさもしみて知る覚の水の今日は音なく
「アメリカン?」「ノーラーマニー」の若き女正座の膝を撫でつつ微笑める
鈍翁の設えし茶室の床柱触れてみよとの声いすこより
中将姫のみ手も触れたる時ありや当麻寺の古材にしむる年輪
当麻寺の材くりぬきし鉈跡にふれてはるかの時を引き寄せす

松永智子

山の音

・嵐

裸木のひともとありて庭ひろしこぼしたる声いまにただよふ
霜月の空高くしてふかくして落ちさうなる星ありひとつ
十七夜の月みてあればまぎれなくひびく音ありはるかなり音
すぎゆける時くりたたね冬の空見上げて立てば山の音とほし
消えのこりあはあはただよふ影あらむ夜の窓はしづかに閉させ
霜月の空高くしてふかくして落ちさうなる星ひとつあり
双の手を垂れて見上ぐる夜の雲うごくともなし霜月のゆく

年輪の少なきバウムクーヘンを取り込みて私は若やぐ
モーツアルトの海に心は泳ぎる今朝も新聞斜め読みして
葉書より飛び出す程のひらがなに絵本の礼状届きたりけり
一巻が宇宙の卵と見せくる乳白色の大切な石
大根は安いぞ今日は老いふたりおでんが熱いはひふへほほほ
幾千の夕日を軒に滴らし静まる柿の里に入り来し
このころは吾も隠し事あらざりき少女がふたり落葉掃きする

宮本靖彦

友よ友

・凌

かりそめに生けたる芒に玄関の丸窓の活き秋深みゆく
捨て頃と思ひしクレープ、網目シャツ猛暑を想ひ持越しに置く
代赭色の落葉をあつめ土おぼふチユーリップの紅黄色榮ゆべし
道寄りの実のみを残しあとなべて鳥食へ終へぬ留守宅の柿は
紅葉は道を飾りて常かよふ団地の細道森の小径よ
ショーウインドウ全てにサンタ踊りるて年金減額頭かずめる
友よ友 杖にすがれど足進まず商社に勤め世界駆けしが

三好聖三

夢夢

・伊

燕麦が風にそよいでいる今日は小春日和のひかりあまねし
鰯の皮鰯の模様に粟立ちて食卓の皿遠ざけている
指を切る 刺身のようにゆっくりと分けて並べる夢のなかほど
切り分けた指片方を指に戻しているテーブで締めて街へ出て行く
怪しさがひときわ冴えるこのころの吉岡里帆の演技カマキリ
張形を弄びつつ床にいるおおつこもりはおのこと遊化む
晴れわたる師走の空をいつもより少し大きくうつるもち月

御代田澄江

古城の如し

・茨

山下雅子 訣れ

・習

目的地周辺とカーナビ案内終りそこより友と探す一時間余を
細き路地幾度も曲がり古民家は人誘ひ拒む趣き古城の如し
坐敷奥点る提灯家具調度二百年の棟木黒光りして
古色帯ぶギャラリーレストラン営める往にしへ女主か妖しく美し
妹を嫁がせ吾は生涯独身にてこの家守ると泰然婉然
雨に濡るるさ庭の敷石ふと見れば隠れ上手の揚羽の幼虫
古郷に帰りしかも雀躍と舞ふ揚羽蝶もしや彼の虫

もとむらしげと

猫

・そ

我が足に柔く触れくるものあり炬燵に猫の住む季節来て
階段の明かりつけば踊り場に猫が丸まり孤独にひたる
朝餉どき近づけば私が立つたびに先回りして走りゆく猫
カーテンの蔭に隠れて座る猫そつと覗けばミャアと見あげる
猫用の丸きベッドから手も足も頭もはみだし昼寝する猫
我が立てばさつと占領してしまふ猫とひとつ席を争ふ
首筋を撫づればまなこを閉ぢる猫おまへとどちらが長く生きるか

八乙女由朗

杭

・柴

熟れ残るうしろの藪のカラス瓜北風うけて冬に入りゆく
西空に路線がありて空港を発ちたる赤き胴体が飛ぶ
同輩の誰も彼もが世を去りて荒野に立てり杭のごとくに
頭を占むるかかりつけ医院二つあり治療の望みを持たずに通う
うら若き孫に伝うる寺なれば運転免許証の更改を悩む
長生きを省みすればわが子らに迫る定年ありて寂しも
戦時下に生まれて受けし名のあわれ流るる時はそをば消したり

吉内尚彦 人生の秋

・浜

農道に秋の日を受け枯れ色のバッタ一つがじつと動かず
歩けないわれも電動車いすを止めて動かぬバッタ観ており
もう一度きっと行きたい地中海全国大会この足治れ
四十二年妻子のために働きぬ日曜もなし祝日もなし
晩秋の窓辺に親と子の蜘蛛が一つの巣をはり揺られておりぬ
昨日見し親と子の蜘蛛 子のほうが糸にくるまれ餌にされおり
鉢叩かそかに鳴く夜しみじみとわが人生の秋を思えり

「つゆ明けか」なつかしき声連れてくる遠雷の音しばらくひびけ
うつとりと木犀の香に包まれき迫る訣れを互みに知らず
木犀の香り果てたるそのめぐりじわり晚秋の間に包まる
人気なき園をめぐりて小春日のぬくもりベンチにひとり占めせり
道隔て手を振る笑顔誰ならん咄嗟にもたつく脳はがゆし
合歎を愛で百日紅仰ぎ山茶花の蕾ふくらみ師走近づく
石蕗の黄のはなやく庭隅に及ぶ小春のひかりがおどる

横田敏子

香香

・福

吉永惟昭 過ぐ年

逝く年

熊

◆◇◆第一歌集の頃◆◇◆

一番星見つけることに偏執の鍵つ児の友 星となりにき
優しやさし中井小枝刀自逝き給う喪中欠礼くやし口惜し

地中海熊本支社長竹行師支えて賢母歌人なりにし
結婚を祝い「家居を思ほゆ」と前田夕暮ゆかりの佳人

平成の終りを決めて春を待つ 地震の廃居は路の黄の花
坦々と家事をこなしつつ妻を見て惜しむがもなき年の瀬に浮く
あれまさる里道のほとり薺ため二列に並ぶ水仙の伸び

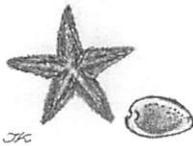
久我田鶴子

三丁目の夕日

羊

北新宿三丁目なる一角に夕日みるまでゐたことがない
台所の窓の木枠に埃たまり丈のちぢめる伯母独り居る

五ヶ月も賞味期限の過ぎたるをなほ豆腐とし冷蔵庫ある
ころんだら起き上がれない 百歳が間を置きて言ふこれは何度目
汚れたるお盆の上に伏せられて茶碗と箸が独りを語る
ヘルパーさんにさせるからいいと言はれつて雑巾に拭く台所まほり
病院に行くを拒みて動かざる伯母の事情のなにかに触れず



牧雄彦『誰もゐぬ部屋』

昭和六十二年四月二十七日 ながらみ書房

●自選五首

●ミニエッセイ

・今ははや焼かるる父かヘルシンキのこの蒼きあをき空のひろがり
・ふるさとを父の遺影と歩みたる秋のゆふべのとほきくれなる
・中天にすすむ月蝕この地には子らのねむりの深みゆくなり
・ひそかねどわれのいのちの一瞬のかがやきにゐるて冬の虹たつ
・ひつそりとマゼンタのばら聞く部屋わがるてしかも誰もゐぬ部屋

昭和四十八年九月九日、一ヶ月間の単身での出張のちょうど
中ほど、コペンハーゲンに滞在中の日曜日だった。父の死を知
らせる日本からの電話が入った。翌々日ヘルシンキに飛んだ私
は、訪れたオリンピック記念スタディアムの塔の上から地平線
のかなた、日本の方角を見つめていて、その時に初めて短歌を
メモしたのが一首目。翌昭和四十九年に地中海に入つて最初の
歌会に出したのが二首目である。三首目はまだ幼かった四人の
子供たちが寝静まつて、折から月蝕を一人見ていた時の作品。
四首目は癌の手術を受けてしばらく経った頃の作品。五首目は
第一歌集の歌集名にした作品である。短歌を始めて十三年、香
川進先生にすすめられるままに拙い作品を一冊にまとめたのだ
が、いま読み返してみると、いったいこの四十三年間でいかほ
どの進歩が見られるか、まことに忸怩たる思いである。むしろ
第一歌集の頃の作品の方が鋭敏な感覚が見られるのではないか、
今は惰性に流されていないか、などと反省しきりである。

冬の歌

(『湾』より)

白髪のひとが顔あからめた、福寿草のはなを見ていたのだ
柱のうしろだってピアノはきこえるがだれもそこに坐りはしない
人間が、点滅灯のように生きて死に——そんな速度もいい
真珠よりずっとうつくしい膚をもつ・いわしだとただ見つめる
五円玉も出てこない壁だが人間はやはり蹴飛ばしたりする
棕梠には棕梠の花が咲いたって人のいいやつは食ってゆけない
なんにもなくなったら原子のなかの孤独を覗くことだよ
もう一尺遠ざかると見えなくなるところで人生を見ている
妻よ野菜のようなおまえの声を聞き、はつとして、生きつづける
木綿のよう清潔な雪、枝はいつも死にたいとおもつていて
いっせいに埃が流れはじめる白磁のような美しい衣裳を残して
自殺しようとしたとき愛しはじめたといつか言おう本当のことも

家族

浜名 結衣

子供と自然につつまれて

門越しに手を振る息子今日もまたキリリと凍った朝に溶け込む弟も妹も違う兄の影兄とは偉大な存在なるかな

学ランの襟が固くて窮屈とつぶやくこの子ももう中学生制服のズボン破れたごめんなさい何度縫えばとため息一つ忘れ物ない大丈夫登校後机の上にプリント発見

兄貴にはテストも野球もかなわぬがトランペットは負けぬ音色よ

ライト浴び踊る姿はきらめいて反抗期などしばし忘れる

反抗期どれもこれもが気に食わぬ娘に親も徹底抗戦

散らかした落書き片付けため息も「おかあさん」の文字つい笑みが漏れ手袋を一人ではめた末娘指が足りぬと不思議顔なり

健やかな寝息静かに聞こえる夜温かな手をぎゅっとつなぎて

いつまでも一緒に寝ようねお母さん幼き笑顔が胸に染み入る

ストーブの前が大好き子どもたち風の子は今休憩中なり

学生の頃に授業でやったきり、特にご縁のなかた短歌の世界。ある時、さる方が勧められ、軽い気持ちで詠んでみたのが始まりでした。

幼い頃より自然あふれる田舎で育ち、大人になってコンクリートジャングルを経験し、再び今、田舎に舞い戻って過ごす毎日。夫と子どもたちとの時間は、実に様々な出来事が満載です。

学校から帰ると、我先にと今日の話を始める小学生と中学生。園で作った作品を見せてくれる末娘。一人一人の話を聞いて、褒めたり叱ったり、喜んだり悲しんだり。大騒ぎでドタバタと過ぎるたわいもない生活から、短歌がふわりと生まれてきます。

入学式、七夕、運動会、誕生日、クリスマス、お正月。季節の行事とともに、時には夫婦喧嘩さえも生活を彩っていきます。

私の短歌は、難しい言葉を使うわけでもなく、どこにでもいる一主婦の日記のようなものです。本誌に名を連ねておられる方々には遠く及びませんが、私らしく、私の言葉で。こんな私に書かせて頂く機会を頂き、本当にありがとうございました。

今月の二人

白駒
はつこ

松井 千明

出会い

年の暮れまたも迎えて思いけり八十路超えにし生命のありよう
これからを語ること得ず来し方の思い出のみに生くるか詮無し
一人減り一人減りして同窓の声はずむ会今は昔に

枕辺に見舞う我らを見詰めつつ友はまぶたを妻に拭わる

還暦の同窓会に招かれぬ十五の春の風雪の面

午後の授業さばりて行きし奈良街の映画の館今は影無し

刈り穂あと田はひろびろとくつろぎて麦笛作るよすがとて無し

涼満つる夏の夜明けの畑中は猛暑忘るる至福のひと刻

十三夜影こうこうと刈り込みの庭にそそぎて秋の饗宴

すすめ蜂軒を借りての巣作りはアート宜しき幾何学模様

駆け下る山道際にアケビ垂る急ぎの帰途にしばし刻借る

初孫を軽々抱きて歩き行くバアバというにはてさて我が娘

曾孫抱き細る力を腰にため外へと歩む秋空高し

短歌を始めて早二年半になる。その間、精を出して作歌を試みるも未だこれといったものはできていない。
かつて私は民謡や詩吟をやっていたことはあるが、詩歌を作るといったような事は夢想だにしなかった。

それが、今回短歌を作るようになったのは、たまたま病院で出会った同窓の友から夢想だにしなかった。

若しあの時この出会いが無かつたら、短歌の世界も知らず無為な人生を送っていたことであろうと思う時、一つの奇縁を感じずにはいられない。

平成二十六年七月、初めて町の短歌会に二首を持って参加した。そこで浜谷久子先生や先輩諸氏と接し、会の和やかさ、温かさに魅せられ、以後出席していくところ、図らずも地中海への入会の勧めがあつて描いながらも加入させていただいた。
ところで、最近になって私自身の変化に気付いた。それは、刻々と変化して已まぬ自然や、物事への微妙な心の動きについて深く捉え立ち止まって観察する姿勢が出来たことである。このことを皆さんに感謝しながら作歌をしている昨今ではある。

◆今月の二人・浜名結衣作品評◆

「おかあさん」の文字

◆今月の二人・松井千明作品評◆

評者・久我田鶴子

浜さんは、中学生を頭に三人の子を持つ母であるらしい。子育ての奮闘振りが微笑ましい。

・門越しに手を振る息子今日もまたキリリと凍った朝に溶け込む

逞しく成長した息子。「行ってきます」と門を出たところで毎朝、手を振るのだろう。「キリリ」が冬の朝の空気の引き締まった感じとともに、息子の姿をも想像させる。

・学ランの襟が固くて窮屈つぶやくこの子ももう中学生

学ランが制服の中学校に通いはじめた息子。「襟が固くて窮屈」などと呟いている姿に、誕生からここまで成長を重ねて眩しく見ていることだろう。

・反抗期どれもこれもが気に食わぬ娘に親も徹底抗戦

こちらは、園に通う末娘。その反抗期に手を焼きつても、「徹底抗戦」の構え。親には子を上回るパワーが必要だ。・散らかした落書き片付けため息も「おかあさん」の文字つい笑みが漏れ

「徹底抗戦」の後では、こんな一コマも。ほっと心の和むひととき。この子の母親であつて良かつたと思う瞬間だろう。親子の繋がりは、寄せたり引いたり、荒れたり疎いだり、波のような繰り返しがあって深まっていくのかもしれない。・いつまでも一緒に寝ようねお母さん幼き笑顔が胸に染み入る子どもの言った言葉をそのまま活かして、カギカッコも無し。柔らかく、それこそ「胸に染み入る」ようになれる、こうした子どもとの時間を持つて幸せが素直に伝わってくる。

松井さんは、八十代に入ったところらしい。どうやら曾孫もいるようだ。歌を始めてからは、二年半という。・年の暮れまたも迎えて思いきり八十路超えに生命のありよう

年の暮れ、一年が終わる頃には、また齢を重ねる自らのことを見しも思うものだろう。だが、「八十路超えに生命のありよう」と、俯瞰的に生命を見ているところ、スケールが違う。・枕邊に見舞う我らを見詰めつつ友はまぶたを塞に拭わる友を見舞いに行つたときの歌。友の流した涙には、どんな思ひがあつたのだろう。「まぶたを妻に拭わる」からは、もう自分の力では涙も拭えない友の姿が浮かんでくる。

・午後の授業さぼりで行きし奈良街の映画の館今は影無しこの歌の前には「十五の春」の歌がある。啄木はサボつてお城の草に寝転んでいたようだが、松井さんは街で映画を見ていたらしい。しかし、その映画館も今はもう無いといふ。・すすめ蜂軒を借りての巣作りはアート宜しき幾何学模様軒下のズスマバチの巣を見て、「アートみたい」と感嘆したのだろう。「アート宜しき」が味わいを出している。

・初孫を軽々抱きて歩き行くバアバというにははてさて我が娘わが娘が初孫を抱いているという、その驚き。しかも、軽々と抱いて歩いている。「バアバ」には違いないが、はてさてどんなもんでしょう、と可笑しさを堪えているような歌だ。十三首のうち三首が「無し」で終わっているのが気になつたが、ユーモアのある人はポジティブでもあるにちがいない。

私が初めて短歌というものに出会ってからもう五十年ぐらいになるでしょうか。私を短歌の世界へ導き、長いブランクの後にまた、短歌の世界に戻ってこれたのはこの「地中海」でご活躍なさった阪口保先生との出会いがあつたことに尽きると思います。それは私がまだ神戸の短期大学に入学した頃、十代の終わりに遡ります。当初私は中世文学に憧れそちらのゼミを希望したのですが、どういった訳かふたをあければ上代文学「相聞の展開」のゼミに入れられました。がっかりしたことを今でも思い出します。そしてそこで初めてお目にかかったのが生涯の師となる先生その人だったのです。阪口先生は柔軟なお顔に口髭をたくわえた当時の私にとってはやさしいおじいちゃん先生でした。そして、短歌を作ることを勧められ、作れば単位をくださるとの理由で作り始めた、というのが私と短歌の出会いでした。先生は「人は歌を作り歌は人を作る」といわれ、また「感じた事を素直に詠めればよい」とも言われました。短歌など難しくとても自分で作れないと思って居たのですが、先生のその言葉に心を動かされ、五七五七の限られた文字数のなかに自身の想いを込めることの面白さに気付き、拙いながらも短歌への第一歩を踏み

出すきっかけとなつたのです。

自分の力不足に悩む時、思い出すのが阪口先生の「感じた事を素直に」の言葉です。今はまだ勉強の途中だと自分に言いきかせ歌を作っている日々でした。その間、歌会に参加するようになりお仲間の合評を聞いていますと自分が何かいっぱいの歌詠みになつた気がしたり、教科書で習つた数々の有名な歌人たちの世界に身を置いた気になつ

私と短歌との 出会い

186

杉浦
詩子

たのことを今も覚えていいます。それでも、批評することはとても難しく一人の人の大げさなど言葉だけでは作れないと思うとただ何も言えず、指名されても消え入るような声で「わかりません」としか答えられずいぶん恥ずかしい思いをしました。でも、自分の歌の批評をされる時は、どん

なことを先生達や出席の皆さんが言つてくださるだろうとドキドキもしました。若くてまだ歌を作り始めたばかりの私にも一生懸命その心情を読み取るとして下さる事が心嬉しく、また次への作歌への意欲が湧くのでした。阪口先生はどんなに私の歌が拙くても「これが詩子だ」とそのまま出してください、誉められるところを見つけてほめてくださいました。それが次への一步となつたと思います。短歌を義務から作り始めた時、私は青春のまっただなかにいました。心の内を言葉に出来る喜び、景色の全て、人の温もり、空気の匂い全てが心の内を表せる題材で生きていることが歌の材料なのだと気がつききました。

卒業して身辺の様々な変化があり、何十年もの長いブランクの末に、また歌の世界に戻ろうと思った私の背を強く押してくれたのもこの言葉だったのです。そしてまた地中海に帰れた時、田土成彦・才恵ご夫妻に再びお目に掛かり、今まで心ときめく歌の世界でご指導いただいています。昔と違ひしゃにむに歌を作る事は出来ませんが時移ろい、自然の音にゆっくり耳を傾けながら言葉にする作業を続けています。そしてお仲間達と刺激しあいながら作り続けていきたいと思っています。

作品 A (ア行)

赤坂たけ子

姉

森

亡き父母に昨夜の夢にて会ひたりと幼子のこと姉はほほゑむ
病床の姉を見舞ひて帰りし夜永訣のおもひ胸を突きくる
諸もろの悩める人に添ひ來たる姉なり修行のごとき一世よ
神道を究めし姉なり旅立ちの白装束に神氣漂ふ
ひたすらに歩み來し姉の神葬祭 胸熱くその謳をよむ
姉をおもひせる大社の自然墓所山の斜りに鎮まり深し
なだらかな山の斜面に広がれる小さき標識の個人墓の列

赤堀敦子

台風

岡

ふはふはと汁につみれを浮かせつつ今日の重つき思ひは去らず
薪を背負ふ金次郎の像を見上げつつ歩きスマホの時代を思ふ
紀伊半島に近づく台風の進路見つつ広戸風来ると思ふ切なさ
四十七メートルの風荒るるなか灯は消えて屋根瓦飛ぶ音を聞くる
歌ひとつ詠み得るままに午前二時「もう寝よ」と夫が杖つきてくる
摺り足で廊下を歩く夫を見む浅き眠りを断ちて立ちゆく
去年ここに野点をしたる友は亡く公園の水車は虚しく回る

上石幸子

赤い靴

福

剪定もままならぬ身となりし夫辛夷の大木バッサリと切る
毒を持つ馬酔木の花は自らを滑めることく白く咲きおり
赤い靴に裾の細目のスラックス身を飾れども老いは隠せず
三年振りに会いたる友に驚きぬ背中を丸め杖にすがりて
この年の思いは悪しきことばかりきれいさっぱり大河に捨てたし
八十路越え薬は何も飲んでもせん誇らしげに言う貴女は魔女か
シルバーカー少し抵抗あれど押せば足腰の味方となりぬ

阿尻みさを

優しき家族

む

幼き日祖母の語りしこどもがふとよみがへり頭の下がる
柔道の師範の父上無口なり美し母上模範の淑女
何事も祖母にたづねて従ひし母のお姿いまも鮮明
弟子たちを子供以上に愛す父素晴らしお弟子さんみな優しく立派
少女期に父にたづねし護身術おかげで無事に八十八歳迎ふ
亡き夫は天才なれど優しくて真面目にすべて懸命で立派
孫四人息子娘の配偶者みな真直ぐに優しく嬉し